第１回　アート・イン・ビジネス研究会　要旨

日　時：7 月 22 日（月）　17:00～18:30
場　所：八坂神社常磐新殿　参集所

テーマ：「祇園祭における祝祭性とアート」
アートは祝祭性を高める役割を果たすことによって、大衆への浸透が深まる。この祝祭性を高めるアートの特徴とは何かについて研究を進める。

講師：　八坂神社宮司野村明義（のむらあきよし）氏

出席者：（敬称略）
座長　山極 壽一　総合地球環境学研究所所長
　　三木 均　リシュモンジャパン株式会社　代表取締役社長
　　堀田 律子　リシュモンジャパン株式会社
　　河島 伸子 同志社大学経済学部教授・創造経済研究センター長
　　八木 匡　同志社大学経済学部教授・ライフリスク研究センター
井上 昌之　日本経済新聞社
　　井上 眞理子　地域創生プロデューサー
武智 美保 ミホプロジェクト
田中 眞澄　同志社大学 創造経済研究センター
（注：台風の影響で井上昌之、井上眞理子は当日欠席。）

アート・イン・ビジネス研究会 「日本におけるラグジュアリーの源泉としての平安文化」

・これからの「共生社会」の必要な要素がすでに組み込まれていた。

日本の伝統産業や文化の源流を探る研究会の第 1 回が、2024 年 7 月 22 日に八坂神社にて開催され、「祇園祭における祝祭性とアート」をテーマに講演と意見交換が行われた。講師は八坂神社宮司の野村明義氏で、平安時代の陰陽道や祇園祭の起源、祭りの構造や意味について深く解説した。

祇園祭の歴史と疫病鎮静の役割

祇園祭は 869 年に「神泉苑」で疫病鎮静のために始まった神事であり、当時の陰陽師や国家機関が疫病を鎮めるための祭祀を行ったことが起源である。主祭神の素戔嗚尊は水を司る神であり、これら自然元素の浄化作用を利用した祭りであった。

陰陽道の虎の巻《簠簋内伝》に基づき、野村氏は独自の暦を作成し、疫病鎮静の祭りの原点を見直す取り組みをしている。疫病鎮静のための祭りは、平安時代の天皇や安倍晴明の指導のもとで進化し、「祇園臨時祭」として満月に合わせた水の浄化神事や神輿渡御（みこしとぎょ）が行われてきた。それが今ずっと伝わって、今年で 1050 年。

祇園祭の構造と陰陽道の影響

祇園祭の 66 本の鉾は、陰陽道の神聖な数字「66」に由来し、これは宇宙のエネルギーを表す三角数でもある。数字の「11」も陰陽道で太極の数字として重要視され、これらの数理が祭りの構造に反映されている。

山鉾は風水の原理に基づき、都の気の流れを整える役割を担い、かつ祇園囃子の音響祭祀が空気中の邪気を浄化する。稚児は疫病退治の役割を持ち、孔雀の冠などの装束は毒を消化する力を象徴している。これらはすべて陰陽道の思想が結集された祭りの要素である。

現代における祭りの変化と課題

室町時代以降、祇園祭は神事から見物や楽しみの祭りへ変化し、昭和期には山鉾巡行のコースや回る方向も変更された。これにより疫病鎮静の本来の意味が薄れ、祭りの祝祭性と神事のバランスが崩れたと指摘されている。現在では旧暦の満月に合わせた祭りの復興や神仏習合の法要を通じて、信仰の原型の回復を目指す動きがある。

陰陽道と神道の思想

陰陽道は自然の隠されたエネルギーを読み解く学問であり、火と水、プラスとマイナスのエネルギーの調和を重視する。漢字や言霊にも陰陽の意味が込められていると説明された。神道は「感じる宗教」として目に見えないものを心の目で感じることを重視し、清ら

かさと美しさを基準に行動規範を定める。

神仏習合と宗教融合の独自性

日本の神仏習合は陰陽の調和に基づくもので、世界的に見ても特異な宗教融合である。キリスト教や仏教、儒教など異なる思想が共存し、戦いを残さず平和を尊ぶ文化が形成された。明治期の国家神道による仏教分離は信仰の歪みを生み、現在もその影響が続いていると述べられた。

伝統の継承と秘技

八坂神社には宮司のみが扱う秘技が存在し、神輿の神気を高めるための神事は夜間に密かに行われる。これらは口伝で継承され、一般には公開されない。秘技の伝承は次代の宮司に引き継がれていく。

文化的象徴と自然信仰

祭りや神事に使われる紙垂は雷を象徴し、しめ縄は雲を表すなど自然現象の象徴化が行われる。伊勢神宮の位置は太陽信仰に基づき、富士山や夫婦岩との関係がある。山と海の信仰は両立し、山は動かず神の依代として安定を、海は動的で時に恐怖をもたらす存在とされる。

祇園祭の祝祭性と地域活性化

祇園祭は神事としての疫病鎮静の役割とともに、町衆が楽しむ祝祭性を持つ。祭りの継続には神事の厳格さと祝祭性のバランスが重要であり、神事を中心に据えた限定的な祝祭性の維持が議論された。現代の祭りの楽しみ方が神事の本質を損なわないよう注意が促された。

日本人の宗教観と感性

日本人の宗教観は「信じる」より「愛でる」文化であり、形なきものを感じる感性が根底にある。神道は簡潔で美しいものを尊び、清らかさを行動規範とする。こうした文化的背景が神仏習合や多様な宗教的融合を可能にしていると説明された。